

# “美味”を意味する語の使用と性差

—「おいしい」を中心に—

高崎 みどり

## 抄録

随筆と自然談話を材料にして、日本語の美味を表す語が、それぞれ使用に性差がみられたり、ジェンダーをクロスさせて使用されたりしていること、そして、話し言葉と書き言葉、和語と漢語、丁寧な言葉と非丁寧な言葉などとして使い分けられていることを示す。

キーワード：美味、ジェンダー、類義語、差異化

## 1. はじめに

本論文では書き言葉における「おいしい」という語を中心とし、「うまい」「美味」を加えたプラスの味覚評価語の使用実態と使用主体の性との関わりについて考察する。

材料は、雑誌『文藝春秋』A（1999年4月号～2003年8月号の巻頭随筆500編からそれらの語を使用している随筆26編）、同じく雑誌『文藝春秋』B（2010年7月『文藝春秋 SPECIAL』季刊夏号の「スペシャル・エッセイ② 忘れられない旨いもの」10編）の合計36編を使用する。なお、以下では簡便のためAとBを合わせて「随筆データ」として一括して扱う。また比較のために、食べ物のお話が出てくる会話データや、国定国語読本、明治期の英和辞典などを適宜参照する。

## 2. 随筆における使用実態

『文藝春秋』Aの書き手は男性18人<sup>(1)</sup>、女性8人、『文藝春秋』Bは男性6人、女性4人で、「随筆データ」として合計すると、男性24人、女性12人となる。これらにおける「おいしい」「うまい」「美味」の使用数は以下のとおりである<sup>(2)</sup>。

表1 随筆データにおける性別使用回数

	「おいしい」の使用回数	「うまい」の使用回数	「美味」の使用回数
男性 24人	14 (0.58)	30 (1.25)	7 (0.29)
女性 12人	30 (2.50)	4 (0.33)	0 (0.00)
計 36人	44 (1.22)	34 (0.94)	7 (0.19)

注：( )内は1人の書き手あたりの平均使用回数

これをみると、男性は「うまい」に、女性は「おいしい」に偏る傾向が見て取れる。男性は、「うまい」の他、「おいしい」「美味」も使っているのに対し、女性は、「おいしい」に使用が偏り、「うまい」をあまり使わず、「美味」を全く使っていないということがわかる。

表記の面では「おいしい」では男性女性とも「美味しい」がそれぞれ9回、15回と最も多い。「うまい」は女性の使用がもともと少ないので何とも言えないが、男性は「旨い」「美味い」「うまい」が、各々11回、10回、9回と同じような頻度で使われていた。以上を合わせ考えると、“美味”を表す語については、男性の方が選択しうる語彙・表記の種類が豊かなように見える。

今回の随筆データで見える限り、「おいしい」「うまい」の2語の使用に関して、女性・男性のどちらかに使用の多少の差がみられることから傾向的性差がみられ、「美味」に関しては、女性の使用がゼロであったことから絶対的性差がみられたこととなる。もちろんこれは、結果的に対象人数が男性の方が女性の2倍になってしまったことにも関連があるかもしれない。

### 3. 使用の性差から見た3語の吟味

さて、これら3つの語は、“美味”を表す語彙として、相互に類義関係を持っているのだが、それらの間の差異とはいったいどのようなものであろうか。そしてその差異がどのようにして性差とむすびつくことになったのであろうか。まず女性の書き手が多用していた「おいしい」について見てみよう。

「おいしい」は、もともと女房詞「いし」（「いしい」<sup>(3)</sup>）に江戸時代「お」が冠せられた語だといわれる。「いし」はシク活形容詞で“よい、上手だ、見事だ、とてつもない”等の意で多義だが、これを味覚に関して使うのが女房詞としての特色となった。すなわち、味覚のプラス評価に関しては「うまい」や「美味」の方が歴史的には古くから見える語であったが、“旨い状態”を「うまい」と言わずに「いし（美し）」であらわすようになったのが女房詞としての使い方であったのである。もっとも、「いし」という語自体が中世から多く用いられるようになった語であり、『古典対照語彙表』には立項が見えない。また、中世には女房詞以外の言語資料にも“美味”の意で「いし」は出てくる（1371年以降成立「太平記」など）し、室町末期に「いしい」の形も見えて、江戸時代にそれに丁寧の接頭辞「お」を付して引き続き使用されたと考えてよいだろう。江戸時代にも1700年ころの『浦島年代記』（浄瑠璃：近松門左衛門作）に「丹後の生鮒上方にもめじると申て有げなれど。そのいしさが何ンとして。」「其股くらにはさんだ貝がいしい事でござんすげな。」と「お」をつけないで使用する例もみられる。「おいしい」は、その「いしい」に対する丁寧語として使用され始め、それにいわゆる“女性語”の源の一つとしての「女房詞」の記憶が呼び出されると、女性ジェンダーの方に関係づけられるのであろう。たとえば江戸時代の『女中詞』<sup>(4)</sup>には、「おひしひ」が「甘き事」の女中詞として記されていることを見てもわかる。

「おいしい」は近代初期の国語辞典類でも「女性語」として説明されることが少なくない。明治時代の『言海』（1889-1891）、の「婦人ノ語」、『大言海』（1932-1937）の「婦人ノ語」「女詞」、『日本大辞書』（1892-1893）の「多ク婦人小兒ナドガ云ヒ」などである。『和英語林集成』（第三版 1886）にも「Wom.」の表示がある。また、現代語でもたとえば、『日本国語大辞典』「うまい」項目の「補注」に「現代共通語では、女性は『うまい』より『おいしい』を使う傾向が強く、一般に『おいしい』の方が女性らしい表現として、また、『うまい』よりも丁寧な表現として使用されるという文体差・位

相差が認められる。」とある。ここでは、傾向的な性差とともに、丁寧さの差異も指摘されている。

すなわち、「おいしい」が、中世から現代まで、女性使用や丁寧さと関係づけられて捉えられてきたことがわかる。

次に、「うまい（うまし）」は、上代から味に関して使われた例を持つ。また、用例には乏しいが、シク活用の「うまし」も存在していたとされる。上代においては、「ウマシ（ク活用）は対象自身に備わる性質、ウマシ（シク活用）は対象に対する主観的な価値評価」（『上代語辞典』の「うまし」の項の〔考〕より）との対立があったようである。

このように味覚の評価に関しては「いし」よりも「うまし」の方が古くから現代まで長く用いられ続けた語であるが、そこに「いし」→「いしい」→「おいしい」が出現すると、相対的に「うまし」の方は丁寧ではない語という位置づけに追いやられ、女性ジェンダーとは結びつきにくくなるのだろう。

さて、この「うまい」「おいしい」2語は、語種でいうと和語であるが、もう一つの「美味」という語は漢語である。

「美味」という語は古くは「日本霊異記」（823年以降成立）に「其飲食蘭 美味芬馥 無比無等」（中巻十四「窮まづしき女王吉祥天女の像に帰敬し現報を得る縁」とあり、同様の用法が中巻第三十四「孤みなしごの嬢女観音の銅像に憑り敬ひ奇しるししき表を示して現報を得る縁」にも見え、中世を通じて『毛詩抄』（清原宣賢 室町時代）『補庵京華集』（横川景三 15世紀末頃）等漢文系の資料、『落葉集』（1598年刊）、『日葡辞書』（1603年刊）などキリシタン資料にも用例がみえ、近世には滑稽本にも登場する。

そうした古さを持つ漢語ではあるが、今につながる近代の使用例としては、英語“delicious”の訳語としての「美味」が注目される。

明治時代前半の英和辞書類8種<sup>⑤</sup>を見てみると、うち6種で「Delicious」の訳語に「美味ナル」があてられている。一方②『英和俗語辞典』は“俗語”と称するだけあって「美味」ではなく、「結構な、おいしい、う（む）まい」があてられている。また④『和英語林集成』（英和篇）も「Delicious」については同様に「美味」ではなく、「おいしい、けっこうな、うまい」3語があてられているのだが、名詞「Delicacy」の方には「美味」があてられている。「Delicacy」を名詞として「美味」とあてているのは他に③『英和双解字典』や、⑧『明治英和字典』の2種があり、⑦『ウェブスター氏新刊大辞書』では「Deliciousness」を名詞「美味」とあてている。さらに⑥『付音挿図和訳英字彙』では「Delicate」に「美味ノ」があてられ、⑦『ウェブスター氏新刊大辞書』では「Deliciously」に形容動詞の連用形の活用形である「美味ニ」があてられている。

このように、細かな扱いの差異はあるが、明治前半の翻訳漢語として、古典に典拠をもつ「美味」に再度照明が当てられたものと思われる。翻訳漢語ということで、新しい西欧的な感覚も加わりつつ、漢語のもつ公的場面や学問世界の感覚も引き継いで、「おいしい」よりは重々しい言い方として男性ジェンダーの側についたという可能性も考えられる。そして“漢語忌避”の女性ジェンダーには避けられる語となりそうだが、上記の随筆データの結果はそれを裏付けていることになる。

しかし、「おいしい」が、既に説明したように国語辞書で“女性語”として説明されるのに対して、「美味」は“男性語”という説明はされない。これはやはり男性＝スタンダードからはずれるものが「女性～」と名付けられるという傾向に即している。

以上、随筆における使用の性差という実態をもとにして、3語の類義語としての差異とジェンダーの関係を簡単に見てきたのだが、随筆テキストは論説等と比べてだいぶくだけているとはいえ、書き

言葉である。話し言葉ではまた異なる様相が見られる可能性がある。位相や待遇表現は、書き言葉よりむしろ話し言葉においてより明確に現れてくるということも考えられる。

#### 4. 話し言葉における使用実態

最近の話し言葉では女性が「うまい」、男性が「おいしい」を使うことは十分ありえる、ということとは一般の認めるところであろう。随筆と同じ条件で数を出して比較するのはなかなか難しいが、まず用例を手持ちのデータ<sup>6)</sup>で拾い出してみる。たとえば、教員 A (55 歳女性) と学生 B (19 歳女性)・C (19 歳男性)・D (19 歳女性) が雑談している場面で食べ物に関する話題が 2 種類出てくる。

- 1B 牛タンおいしいしね
- 2A おいしいよね?
- 3B めちゃううまいの C【男子学生の名前を呼び捨てにする】食べたことある?
- 4C あるよ
- 5A さっぱりしてて：おいしいよね：

という会話で B (女性) は牛タンについて、はじめ「おいしい」と言って、2 度目は「うまい」を使っている。教員 A は他の発話も含め一貫して「おいしい」を使っている。

- 6B えでもどっちが好き? 洋菓子とさ：和菓子どっちが好き?
- 7D 和菓子 ねりきり好き
- 8B ねりきり?
- 9D ねりきり うまくない?

ここでは D (女性) も「うまい」を使用している。一方、別のデータで、同じ会社に勤める 5 人の男性の、昼休みレストランで食事をとりながらの会話。E は 22 歳会社員 (営業職)、F は 34 歳会社員 (企画職)、G は 51 歳会社経営者、H は 39 歳会社員 (営業職)、I は 23 歳会社員 (営業職)。

- 10E このパンおいしいですね
- 11F うん おいしい##  
(中略)
- 12G うん おいしい
- 13F おいしい おいしいでしょ
- 14H ここはおいしいだけで##  
(中略)
- 15F 中も柔らかいデザインのフランスパンでおいしいんですね  
(中略)
- 16G おいしい
- 17F おいしいですね

- 18G うん  
(中略)
- 19G あの、これうめーや ちょっと やばいんじゃない  
(中略)
- 20F おいしいね このパン
- 21G 味がある  
(中略)
- 22I パンも：おいしいです
- 23F うん：このパンおいしい##
- 24F このパンおいしいよ##
- 25F ほんとおいしいよ# 〈笑い 複数〉

ここでは男性ばかり5人がさかんに「おいしい」を連発しながら食事をしている。Gは12Gと16Gで「おいしい」を繰り返しながら、19Gでは「うめー」を使用している。

このように話し言葉においては、女性男性とも「おいしい」「うまい」をクロスさせて使用している例が確かに見出せる。しかし、随筆のように量的に「おいしい」「うまい」のどちらがよく使用されているか、ということ、話し言葉のデータにおいて明確にすることは簡単ではない。

量的な調査として、かなり特殊な対象に限定されてはいるが、参考になるデータがある。『テレビ放送の語彙調査Ⅱ—語彙表』<sup>7)</sup>の「[16] 話者性別 [音声] 度数順語彙表」において、男性話者の方は、「うまい」の語彙度数は66で順位112位であり、「おいしい」は度数が27で順位は278位であった。一方、女性話者の方は「おいしい」が度数46で、順位は71位、「うまい」の度数は13で順位は278位という結果が出ていた。「美味」は無かった。ただし注意せねばならないのは、この語彙表では「うまい」について味についての意味とそれ以外の意味とを区別せずに一緒にカウントしていることである。にもかかわらず、テレビ放送においては、女性の話者が「おいしい」を使用する傾向が際立ち、また、男性でも「おいしい」を使用することが見て取れる。また、味覚以外の意味での使用が多分に入っている可能性があるにせよ、男性に比べて、女性は「うまい」という語自体の使用を避ける傾向もうかがえる。

こうした傾向に関しては、「美味」を除いては）先の随筆の結果とほぼ一致する。

ただ、随筆の筆者の性別が男性24人：女性12人であったように、この語彙調査においてもCMを除いた本編に登場する話者の割合は、男性対女性が6, 2:3, 7の割合となっている。述べ語数を見ると、男性69,058語、女性35,597語であり、より男性話者の言語量の多さが明確になる。こうした、メディアに登場する女性の書き手・話し手の少なさは興味深く、無視できないこととは思うが、次元の違う問題として、今は扱わない。

すなわち、話し言葉では、女性のほうが「おいしい」を使う傾向が依然として強いが、特に最近では若い層を中心として「うまい」も使う例がみられること、男性は「おいしい」をある程度使用していることは言ってもよいだろう。

このことは、性差の縮小という説明の仕方でもできるかもしれないが、その縮小の仕方として、女性が「うまい」を使用することと同時に、男性が「おいしい」をある程度使用するというところにむしろ注目したい。すなわち、ぞんざいに言うことが親しみや強調のために必要とされる場面では「うまい」

を使用し、一方より“上品”に言うことが配慮として必要とされる場面で「おいしい」を使用する、という使い分けが性を問わず受け入れられるようになったものとして解釈することとしたい。

話し言葉における「おいしい」は、男性も少し“品の良い”語として使用しているうちに、男女を問わず使う語と意識されるようになったのではないか。

一方で、「おいしい」に比べて「うまい」は男女ともに使う、やや“品の良くない”言い方と意識されるようになった。結果として場面による使い分けにすぎなくなって、それが使用状況の性差の縮小となって現れているのではないだろうか。

なお“品の良い”とは、“丁寧”ということと少し異なる待遇表現の性質であり、どちらかといえば敬語新分類の謙讓語を二つに分けた時の「美化語」的な概念であると考えられる（蒲谷 2008, 福岡 2008）。

以上、話し言葉などでの観察から、考えてみたが、こうした「おいしい」「うまい」についての、性差にあまり関係なく使用されるという傾向は、実はかなり以前にも見られていた可能性もある。

もちろん、先述したように“「おいしい」は女性語”という一貫した捉え方はあった。たとえば、壽岳（1995）<sup>(9)</sup>によると、十代の頃に、北海道生まれの森田たま氏が何かの文章で食べ物に関して「ウマイ」を使っていたのでびっくりした記憶があるという。1924年生まれの壽岳章子氏にとっては「その頃の私（十代）には、女がウマイを使うということは非常に変わったことであったのだ。」という感覚であったようだ。そして、1901年生まれで大阪出身の母の壽岳しづ氏（1901-1981）は話し言葉でも書き言葉でも「うまい」は使わなかったとし、1900年生まれの父の壽岳文章氏（1900-1992）については「おいしい」は使わぬではなかったが、それ以上に「うまい」のほうが多かった、と述べている。

ところが、壽岳章子氏の1901、1900年生まれのご両親の、言語形成期にあたる時期を含んで使用されていたいわゆる「国定読本」にも、男性が「おいしい」を使用する多くの例、また1例だけだが、女性が「うまい」を使用する例、が見られるのである。以下で見てみる。

## 5. 「国定読本」<sup>(9)</sup>（1904年～1949年）における「おいしい」「うまい」について

『国定読本用語総覧 12 総集編』<sup>(10)</sup>の「刊行のことば」によると、「1901年からの50年は、現代語の基礎の確立した時期と見ることができる。」とあり、その6種の「国定読本」は、「この時期の国語教育の基本的教材であり、その用語は、それ自身発展しつつ、国民的な現代語の成立の基礎をなすことができる。」と説明している。

これらは、お伽話や手紙文や児童作文・日記文、戯曲等の様々な体裁でなされた、話し言葉に近いような文章も含み、対象年齢の幅からいっても多彩な“書き言葉”である。それでも“国定読本”として50年近くにわたる一種の“閉じた”同質の言語世界として見ると、その中でそれなりの変化や特徴が観察できるものと思われる。

そこで、1904年から1949年までの「国定読本」（以降かきかっこをはずす）における「おいしい」「うまい」の使用実態について調べてみた。『国定読本用語総覧 12 総集編』『語彙表』と、同書各巻索引、および本文（『小學讀本便覧』<sup>(11)</sup>、『日本教科書大系 近代編 第九 国語（六）』<sup>(12)</sup>等を使用）を照らし合わせて、使用頻度と、使用主体が男性として示されているか女性として示されているか、



“美味”を意味する語の使用と性差

あるいはどちらともいえない不明ないし特定されない示し方か、という観点からみて以下の表にまとめた。なお、「美味」は使用されていなかった。

表2 「うまい」の使用回数

国定読本の時期		使用回数	男性使用	女性使用	不明・他
第1期 1904年～	うまい	0	—	—	—
	おいしい	0	—	—	—
第2期 1910年～	うまい	7(9)*	2	0	5
	おいしい	0	—	—	—
第3期 1918年～	うまい	2(13)	2	0	0
	おいしい	0	—	—	—
第4期 1933年～	うまい	4(21)	3	1	0
	おいしい	11	4	2	5
第5期 1941年～	うまい	5(32)	4	0	1
	おいしい	18	6	1	11
第6期 1947年～	うまい	17(53)	7	0	10
	おいしい	11	4	0	7
6期 合計	うまい	35(128)	18	1	16
	おいしい	40	14	3	23

注：( )内は「うまかった」など味覚以外の用法も含む総数を示す

\*：2期についてのみ、文語形「うまし」を2例含む

第2期から「うまい」が出てくるが、そのうち書き手が男性として想定されていると判断されたのは、たとえば「足もだいぶくたびれてはらもすっかりすきました。すゞしい風にふかれながら、草の上へすわって、にぎりめしをたべた時は大そううまうございました」<sup>(13)</sup>（『尋常小學讀本』巻六第三「遠足」）の例で、「私」という一人称ではあるが、「はら」「にぎりめし」という語との共起がある。

あるいは手紙文教材で、「鈴木愛吉」という差出人名で「西洋西瓜には色々あるさうでございますが、なるべく大きくてうまい實のなるやうなのをお願い申します。」（『尋常小學讀本』巻七第五「問合の手紙」）のような例もある。いずれも「うまい」が「ございました」や「お願い申します」のような敬体の中で使われていることが注目される。当初はそんなにぞんざいな語とは意識されていなかったのだろうか。

総数で見ると、「おいしい」は「うまい」よりやや多く使われているが、それほどの差とはいえない。そして、男性が使用する回数の方が両語とも多く、これにはそもそも女性登場人物が少ないことも響いている。その少ない中でも、やはり女性は「おいしい」、男性は「うまい」に傾く傾向がかるうじてここでもみられる。僅かながらの性差であると言えなくもない。

ただ、両語とも、「サウシテ、オイシサウ ニ タベテ シマヒマシタ」（第4期『小學國語讀本』巻二第五「サル ト カニ」）のような性を分別しがたい語り手・書き手、ないしは「花は美しく、実はうまい。」（第6期『国語』五下、七「みえない力」）のような事柄主体の説明的文章の中で使用されることも少なくなかった。

女性の「うまい」使用は第4期にみえる1例だけだが、これは道子という児童が書いた作文という

かたちの文章になっており、子山羊について「今ではもうお乳を飲まなくなりましたが、生まれた頃は、乳房をくはへて、うまさうに、すつばすつばと吸って居ました。」(第4期『小學國語讀本』巻六第七「山羊」とある例である。同じ文章中でこのすぐ前に、「草をどさりと投げてやると、三匹が頭をくつつけて、おいしさうにたべ始めました」(同上)と「おいしい」を使用しているが、ここで「うまさうに」と「おいしさうに」を使い分けているようにはみえない。しいていえば、前の例は「すつばすつば」に現れているように、子供らしい素朴さが強調されている中で使われている、ということがあるかもしれない。

国定読本を見る限り、後半の時期から「おいしい」がよく使われるようになり、しかも「すぐに兵器の手入れをして、夕飯をたべますが、そのおいしいことは、またかくべつです。」(第5期『初等科國語』三、十六「兵營だより」)のように男性の書き手が「おいしい」を使う例がいくつも提示されている。あるいは性に関係ない語りや説明にも使われており、必ずしも女性専用というわけではないことがわかる。

女性登場人物の少なさもあって、性差を明確に否定も肯定もできないが、女性登場人物以外を想定している場合でも「おいしい」を多用していることはたしかである。また、既に見た例のように「うまい」とデスマス体・ゴザイマス体が共起する場合、あるいは「おいしい」と常体の共起する場合も多く、丁寧・非丁寧との関係も明確にわかれてはいない。

では、そもそも国定読本のことばはどんな基準によって選択されているのであろうか。海後宗臣編(1964)の「国語教科書総解説」および、『国定読本用語総覧』の各期の解説から、言葉に関係するところを拾い出してみると、第1期には「話し言葉と書き言葉の国語の統一をはかる」「口語を多くし」「用語は東京の中流社会に行われるもの」、第2期以降は「自然的口語に近づけている」「口語文体で自由に教材を編成」「軽妙な印象を与える文体」という反面、高学年になるにつれて不自然な表現も見られるとしている。また、「教材の生活化」「文中に同年輩の児童を多く登場させ」る、という特色のなかで「うまい」が使用される。「児童の体験を通して」「生活感情を豊かにする教材が増している」「児童の自然語というより文学的に表現されている」「文字ことばの教育のほか、話しことばの教育がなされる」「教養ある話しことばを基礎」という傾向の中で「おいしい」が登場して「うまい」をしのぐ。そして敗戦、墨塗り、仮刷り教科書を経て「現代に生きたことば」「口語化」「平易」「児童の表現による教材が多くなっている」「児童作文より取材したもの、児童作文の形をとる教材」、「児童劇」、「口語による自由詩」「会話形式」等の特色の中で、「うまい」も多く使用され、「おいしい」をしのいでいる。

すなわち、「おいしい」「うまい」はこの国定読本においては、総じて言えば、“味のよいこと”を誰かに報告したり、不特定の読み手に対して描写したりする場面で、その時々の子童の生活感情に合った実感的な表現して選択され、示されているのではないかと考えられる。また、女性の登場人物が少なくても「おいしい」が多いのは、性別に扱われない“児童”としての言語使用という扱いであるとも考えられる。

以上のような国定教科書における「おいしい」の使用実態は、話しことばに親近性を持つ方針の中で、女性多使用という傾向の性差や、「うまい」に比較すると丁寧であるという待遇表現上の理由から選択されるのではなく、“教養ある話し言葉”でありかつ各場面での児童の生活体験からも納得できる平易な語が選択された結果であるのだといえよう。同様に「うまい」も、それほどぞんざいな語であるとは意識されていなかったということもいえるだろう。



## 6. 「おいしい」「うまい」「美味」の活用形・品詞性などについて

しかしながら一方で随筆という書き言葉には、今回のデータに限定してではあるが、明確な傾向的性差の保持ということが見られた。とくにもう一方の類義語である「美味」という語は、話し言葉にはほとんど使われないが、随筆では7例、しかもこの資料においては男性専用として使用されている。普通は話し言葉に比べて書き言葉の方が位相的にも待遇的にも中立的であり、書き手の性に左右されないものと考えられるが、今回はそうした先入観とは異なる結果が出た。

ここで改めて3語を比較してみよう。

現代語としては「おいしい」のほうが「うまい」「美味」よりも使い勝手がよい。連用形で使用する場合、たとえば「パイ生地ではなく、春巻きの皮を使うことで、外はカリッ、中はしっとりと簡単においしく仕上がります。」(コウケンテツ「コウケンテツのいただきます！」)2011年2月8日朝日新聞夕刊)では、「うまく仕上がります」と「うまい」を使うと別の意味になってしまうので、男性であっても「おいしい」を使用せざるをえない。味覚評価専用の「おいしい」の方がすべての活用形を使えるのである。一方、「美味」の活用形は、形容動詞として考えると連体形「美味な」・連用形「美味に」は少し使いにくい。今回の随筆の用例にも無かった。やはり名詞性、事柄性の強い語であるということになる。要するに「おいしい」は味覚評価を表す語として使いやすく、かつては“女性語”に親近性を持つ美化語として使用されたこともあったが、現代語では男性にもクロス使用され、さらに話し言葉でも書き言葉でも使える、性に無関係な語となったといえよう。

佐竹・西尾(2005)<sup>(14)</sup>では、敬語を5分類とし、従来の尊敬語・謙讓語・丁寧語に加えて、「丁寧語」「美化語」を挙げる。「美化語」の説明として「美化語は、話し手が自分の品格を保つために用いる敬語である。丁寧語に似ているところもあるが、聞き手に対する敬意を表さない点が異なる。」とし、「美化語」の例として「おいしい」を挙げている。

「うまい」との関係においては、場面に配慮した時の“丁寧語”(“美化語”)として「おいしい」の方が選択されるのではないだろうか。

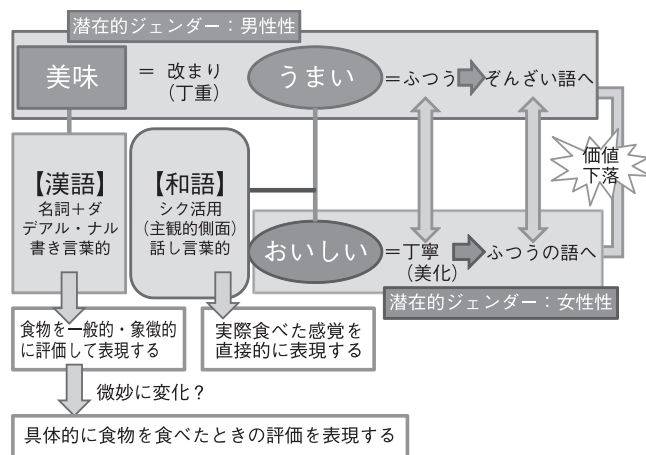
加えて「いし」はシク活用であるが、既に述べたように、「うまし」も上代においては、シク活用もあったといわれている(『上代語辞典』『古語大辞典』等の記述)。このことは、これらの語が、食べ物に対する主観的な価値評価を直接的に表す基本義を持っているということを示唆し、現在「おいしい!」「うまい!」と感動詞的に使われることにもつながっていく。それに比して「美味」は食物を一般的客観的に評価し、やや主観を離れるというニュアンスがある。「美味」は本来名詞ないし形容動詞ナリ活用(ただし連用形「~に」など言いにくい活用形もある)の語幹であり、品詞性も「おいしい」「うまい」とは異なっている。終止形も「美味だ」「美味である」となって「だ」「である」という断定の助動詞と同じ形式をもち、文章語的である。また「だ」は女性ジェンダーが忌避するとされる文末である。こうしたジェンダーからの解釈とともに、「美味」という語が漢語であるがゆえに丁寧・改まりという場面で使用されるのではないかと考えられる。そのことが書き言葉の性格を持っていることに繋がっていく。現に話し言葉データには出現していない。

しかしながら、書き言葉において表記としては「美味」と表記して「<sup>うま</sup>美味」「<sup>おい</sup>美味しい」と読ませることが少なくないこともあって、「美味」は目で見える語としてはそんなに改まった感じはしないのかもしれない。「うまい」は「旨い」という1字の訓読み漢字があるが、「おいしい」にはそれに当

たるものがない。ワープロソフトでも変換すれば「美味しい」が出てくるくらいである。「<sup>おいしい</sup>美味しい」という形で、実は女性も「おいしい」という語と「美味」という語の両様表記という形での「美味」を使っている、という面もあるのだろう。現在は日常の、物を食べているシーンで、「美味だ！」と言うような場面は考えにくい、「美味」という語が目につくと、話し言葉で「ビミ」と言っても通用し、新鮮な表現として歓迎されて、実際に食した感覚を主観的に表現する用法にシフトしていく可能性もある。

## 7. まとめ

さて、こうしてみると、これらの資料を通して指摘できることは、随筆に現れた「おいしい」「うまい」「美味」の使用実態は2つの側面、つまり丁寧と結びついて潜在することばとジェンダーの関係という面と、類義語間の差異を作り出す傾向としての周辺の意味の差異、すなわち書き言葉的と話し言葉的、実感・主観性と事柄・客観性、また改まり・品位の保持と親しみといった類義語間の文体的差異という面から捉えられる。この2つは独立して存在するのではなく相互に関係しており、また3つの語も相対的にそれぞれの位置を定めようとする、そのようなメカニズムが複雑にからみあってこの使用実態が作り出されていると考えたい。こうした関係を単純化したのが下図である。



図

この図を解説する形で、まとめを述べたい。

【①潜在することばのジェンダー性】性差の接近が言われる現代語でも、そして話し言葉に比して性差が認められにくい書き言葉<sup>(45)</sup>でも、随筆というテキストにおいては3語の出現の偏りにおいて潜在するジェンダーがたまたま現れたのだ、と解釈できる。

「おいしい」は、ずっと女性使用と関係づけられて説明されてきたが、そのような中でむしろ男性が積極的に「おいしい」を使用するようになったことに注目したい。その結果、男性は「旨い」という実感のこもった表現、「美味」という客観的な評価という感じのする漢語、に加えて、使い勝手のよい「おいしい」まで入手した。場面によって自由自在にスタイルシフトできるということになった。

背景には、男性が、マスメディアや現実生活の諸側面で、食べ物やそれに関する話題にし、料

理することを単なる趣味ということから生活に必要な家事として扱うようになった、ということもある。まず女房たちが「いし」を食べ物についての評価に使ったとき、「女房詞」という職業特有語の範疇に入れられた。のちにその女房詞自体が女性ジェンダーの側におかれた。明治前半期でも、“女性使用”というジェンダー的説明をされていた「おいしい」は、国定読本で、ジェンダーから距離を置いて、“国語”の中の普通の語としての定着が進んだように見える。にもかかわらず、随筆の結果は、ジェンダーの現れと見る事が可能であるため、ジェンダーが潜在化していたにすぎないのだ、とも言える。

この3語に関しては、少なくとも「おいしい」の使用の性差は話し言葉に現れにくくなっており、「美味」を含む書き言葉で明確な性差が現れた。また、「美味」は漢語・文章語という面から、男性ジェンダーに結びつきやすい。一方、「おいしい」が美化語化すると、「うまい」は“非美化”“非丁寧”の方に自らを差異化し、「うまい」の相対的“ぞんざい語”の位置が定まってくる。そして言葉とジェンダーの関係性において、“丁寧”や“美化”は女性ジェンダー、“ぞんざい”は男性ジェンダーという潜在的な区別が未だ存在しているのである。今回の随筆（＝書き言葉）ではそれが顕れていた。

#### 【②類義語間の差異としての文体・語感的相異】

丁寧や美化の必要な場面では、男性も「うまい」より「おいしい」を使いたいという場合がある。逆にぞんざいに言いたい場面では「おいしい」より「うまい」を女性も使いたいわけである。「うまい」は、ぞんざいだが、それだけに飾らない、実感のこもった味覚評価語として、かえって普通の語として位置づけられる可能性もあるだろう。

「美味」については、同じ概念を和語でも漢語でも言えるとき、漢語の方が改まったニュアンスを示せるという傾向を考慮に入れて、「おいしい」「うまい」に比べて、「美味」のほうには“改まり感”があると判断される。今回、随筆以外のデータでは「美味」が出てこなかったということには、随筆という書き言葉テキストのジャンル性（一人称、ノンフィクション）や、『文藝春秋』というメジャーでパブリックな媒体である、すなわちある程度の改まりが要求される、ということも関係しているだろう。

品詞性もシク形容詞であった「おいしい」「うまい」は主観的感情感覚的であるが、「美味」は名詞で、“美味であること”を表し、「だ」「である」を伴ってそうした評価の判断を表す。ゆえに「おいしい」「うまい」というと感動詞的な面もあって場面のある話し言葉に向いており、「美味だ」は“目で読む言葉”で、書き言葉に向いている。

以上、味覚評価語「おいしい」「うまい」「美味」の3語の使用に関しては、歴史的経緯から根強く潜在していたジェンダー意識と、類義語間の差異化というメカニズムとが絡み合った使用実態が現出しているものと考えられる。これらの関係性はなお変化し続け、流動的である。ことばとジェンダーの関係性というものは、観念的にはシンプルに説明がつく場合もあるが、具体的な語を取り上げると、言語のジャンルにおける相違、あるいは史的变化といった言語変容とも関係づけて捉えざるをえないことの一例となろう。

総じていろいろデータで男性の対象者の多さ、女性の少なさという条件はあるにせよ、男性（あるいはそれに想定される書き手・話し手）も「おいしい」を使っていることは確かである。現象としては女性の「うまい」使用が話題としても注目度が高いにせよ、実は男性の「おいしい」使用にも注目すべきなのである。性差の縮小と一口に言うが、その縮まり方は一様でない。女性が男性専用・多用のことばを使う、あるいは女性専用のことばを放棄する、という方向でなく、男性が女性専用・多

用とされていることばをも、取り込んで使いこなしているという方向においての、性差縮小の意味にも目を向けたい。

## 謝 辞

本稿は、ATJ (Association of Teachers of Japanese) の、Annual Conference in Honolulu (2011年4月1日：ハワイ大学) におけるパネル・ディスカッション “Writing and talking about food in Japanese: Evaluation, gender, and style” の高崎みどり担当分「書き言葉における“美味”を表す語の使用と性差 — 『おいしい』を中心に (On gender differences and the use of words that mean *bimi* 【good flavor】 in written Japanese: Focusing on *oisii* 【delicious】)」に使用したパワーポイント原稿をもとに書き起こしたものである。

発表の機会を与えて下さった ATJ、当パネルの Chair である Polly Szatrowski 氏、当日ご質問下さったロンドン大学岩崎典子氏、そのほか会場の皆様に深く感謝致します。

## 注

- (1) ただし木村尚三郎氏執筆分が2度(1999年8月号と2001年2月号)含まれているが延べ人数2人として数えてある。
- (2) 「うまい」は味覚に関する用法のみをカウントした。また、表記に関して「旨い」「美味しい」など異なる種類の表記もふくめてひらがなで代表させている。終止形以外の活用形も「旨さ」等名詞形も含む。以下の別種資料でも同様の扱いとする。
- (3) 『日葡辞書』(1603年)には「Ixij」の形でみえる。
- (4) 江戸時代の女性用言い換え語集。伊藤幸氏・幸充著、1686年以前成立。
- (5) 8種類の辞書は以下のとおり。( )内は参照した辞書の刊行年。— ①『英華字彙』(1869年)、②『英和俗語辞典』(1879年)、③『英和双解字典』(1885年)、④『和英語林集成』(英和篇 1886年)、⑤『和訳英文熟語叢』(1886年)、⑥『付音挿図和訳英字彙』(1887)、⑦『ウェブスター氏新刊大辞書』(1888年)、⑧『明治英和字典』(1889年)。
- (6) 『男性のことば・職場編』(現代日本語研究会編、2002年、ひつじ書房)付録データ、および科研(平成19年度～21年度科学研究費補助金基盤研究C)「言語行動としての広義引用表現の研究」高崎みどり研究代表)採集データ。以下で紹介する例は見やすくするため、元データのライン番号や、発話者のアルファベット等表示を一部変えて示す。「:」は長音の記号、##は聞き取り不能箇所。
- (7) 1989年4-6月に全国放送網キー局の6放送7チャンネルが放送したすべての番組(CM含む)について抽出単位に分割して無作為抽出し、計量して頻度などを示した語彙表。国立国語研究所編、1997、大日本図書。
- (8) 壽岳章子「女房詞と女性史とのかかわり」脇田晴子他編『ジェンダーの日本史 下』東京大学出版会1995年。
- (9) 「国定読本」は、明治37年1904年から昭和24年1949年までの間に使用された文部省著作の小学校用国語教科書。第1期『尋常小学読本』(イエスシ読本)から第6期『こくご』および『国語』(みんないいこ読本)まで6つの時期に分かれる。
- (10) 国立国語研究所編、三省堂、1997年。
- (11) 古田東朔編、武蔵野書院、1983年。
- (12) 海後宗臣編、講談社、1964年。
- (13) 仮名遣いは資料のままであるが、旧字体の漢字は新字体になおして示す。
- (14) 佐竹秀雄・西尾玲見『日本語を知る・磨く 敬語の教科書』ベレ出版、2005年。
- (15) この問題については、高崎みどり「文体の異性装の実際」『文学』11-4(2010年7・8月)参照。

## 参考文献

### 辞典類

- 『角川古語大辞典』中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編，角川書店，1982年。  
『小学館 古語大辞典』中田祝夫・和田利政・北原保雄編，小学館，1983年。  
『新明解古語辞典 補注版』金田一春彦編，三省堂，1973年。  
『上代語辞典』丸山林平編，明治書院，1967年。  
『時代別国語大辞典 上代編』三省堂，1967年。  
『時代別国語大辞典 室町時代編』三省堂，1985年。  
『江戸語大辞典』前田勇編，講談社，1974年。  
『江戸時代語辞典』頼原退蔵著，角川学芸出版，2008年。  
『女性語辞典』真下三郎編，東京堂出版，1967年。

### 資料類（明治期の和英辞典類，国語辞典類は省略）

- 雑誌『文藝春秋』1999年4月号～2003年8月号「巻頭随筆」のうち「おいしい」「うまい」「美味」を使用しているもの26編。筆者名のみ挙げる（出現順）。男性：蒲島郁夫・木村尚三郎・後藤正治・永井明・堀忠雄・安部寧・南條竹則・松井孝典・木村尚三郎（2回目）・池辺良・逢坂剛・塩田丸男・西部邁・赤瀬川原平・高橋紘・村上龍・童門冬二・阿河弘之，女性：酒井園子・ダオワナ佐紀子・高峰秀子・小林カツ代・上橋菜穂子・平岩弓枝・米原万里・渡辺怜子。  
雑誌『文藝春秋』2010年7月季刊夏号『文藝春秋 SPECIAL』スペシャル・エッセイ②「忘れられない旨いもの」全10編。筆者名のみ挙げる（出現順）。男性：小泉武夫・藤本義一・山下洋輔・山本一力・太田和彦・高田宏，女性：室井滋・松井今朝子・中野翠・津村節子。  
現代日本語研究会編『男性のことば 職場編』ひつじ書房，2002年。  
国立国語研究所編『テレビ放送の語彙調査Ⅱ — 語彙表』大日本図書，1997年。  
国立国語研究所編『国定読本用語総覧12 総集編』三省堂，1997年。  
古田東朔編『小學讀本便覧』武蔵野書院，1983年。  
海後宗臣編『日本教科書大系 近代編 第九 国語（六）』講談社，1964年。  
宮島達夫『古典対照語彙表』笠間書院，1971年。  
遠藤嘉基・春日和男校注『日本霊異記』岩波書店，1967年。  
近松全集刊行会編纂『近松全集』岩波書店，1985年。

### 文献

- 蒲谷宏「なぜ敬語は三分類では不十分なのか」『文学』9-6，2008年。  
佐竹秀雄・西尾玲見『日本語を知る・磨く 敬語の教科書』ベレ出版，2005年。  
壽岳章子「女房詞と女性史とのかかわり」脇田晴子他編『ジェンダーの日本史 下』東京大学出版会，1995年。  
福岡康子「敬語分類の『指針』と問題点」『教養研究』14，2008年。

On gender differences and the use of words that mean  
*bimi* (good flavor) in Japanese:  
Focusing on *oishi* (delicious)

Midori Takasaki

**Abstract**

This paper investigates usage of words that expresses good flavor in written essays and natural conversations and gives evidence for narrowing in the gap between and crossover in gendered usage, as well as characteristics related to genre (written vs. spoken), register (wago vs. kango), and word choice (polite word vs. non-polite word, formal word vs. informal word).